

特集を組むにあたって

飯尾 秀幸

専修大学社会知性開発研究センターに古代東ユーラシア研究センターが設置されたのは、2012年度である。これは、当時の私立大学への研究助成として存在していた文部科学省の「私立大学学術高度化推進事業 オープン・リサーチ・センター整備事業」（略称ORC）に応募した専修大学社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センターの「古代東アジア世界史と留学生」が2007年度に採択され、その研究プロジェクト（前プロジェクトと略称）が2011年度に終了したのを受けて立ち上げたものである。それは、前プロジェクトのなかから新たに登場してきた様々な課題を、さらに継続・発展させようとの考えが強まったことを主な理由としている。

その新たな課題とは、前プロジェクトにおいて、古代における東アジア世界史論の有効性を検討したなかから、さらによりよい歴史叙述の可能性があるのでないかということから生まれた。すなわち前プロジェクトにおいては、東アジアにおける「周辺」・「辺縁」地域である朝鮮半島・日本列島にあった諸権力が、それぞれの事情に基づいて、主体的に「中心」である中国の文化を移入し各々新たな歴史を展開し、一つの世界を形成していったという点、ここに東アジア世界史論の一つの有効性があるのではないかと私たちは考えた。もちろんこの歴史的展開は、一方の「中心」である中国もその動きを利用して、一つの世界というべき「枠組み」（冊封体制）を制度的に確立したという点を前提にしている。しかしこの結論から、では中国の歴史的展開の叙述においては、果たして東アジア世界史論でそれが可能なのか、中国の歴史的展開に大きな位置を占めている内陸アジア、ないしは西北アジアとよばれている地域との関係は東アジア地域以上に重視しなければならないのではないかと、といった疑問が提出されたのであった。この疑問を課題の一つとして誕生したのが、本プロジェクトである。

中国・朝鮮半島・日本列島などで人が移動する範囲（これを本プロジェクトでは「人流」と称する）という視点を設定して、その範囲として考えられる東ユーラシアという地域が一つの地域概念として有効か否かを検討することが、本プロジェクトの課題の一つとなった。そこで新たな研究助成となった文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に応募することとした。その後2014年度に「古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本」と題する本プロジェクトがその事業に採択され本日に到っている。

本号は、昨年度半ばから開始されたプロジェクト2年目の成果を広く公表するために編んだもので、本年度に開催された2回の（通算で2回目・3回目となる）シンポジウムの報告と討論などをその主な内容としている。

第1回目のシンポジウムは「古代東ユーラシアにおける人流」と題して、2015年7月18日（土）に行なわれた。人の流れの具体的検討として、唐王朝成立前後における、内陸アジアに居住していたソグド人の中国への移入の実態を近年出土している碑文を史料として追究した石見清裕報告、人とともに移動したと考えられる馬に焦点を当てて、東ユーラシアにおける馬文化の展開を、馬

具の地域的特色とその比較という視点で追究した張允禎報告、ならびにその大陸から渡ってきた馬具の日本列島における動きを検討した堀哲郎報告をもった。内陸アジア・中国・朝鮮半島・日本列島、まさに古代東ユーラシア地域の人の移動を中心課題とした報告ならびに討論によって、「人流」についての一つの具体的な認識を得ることができたと考えている。

第2回目のシンポジウムは、「古代東ユーラシアにおける中心と周縁」と題して、11月7日（土）に行なわれた。ここでは、東アジアではなく、それを含んだ東ユーラシアという地域概念の設定が有効であるが否かという、上述した本プロジェクトの課題の一つをテーマの中心に掲げたものとなった。本センターの研究員の間で討議を進め検討を加えてきた「中心と周縁」という視点を歴史的に具体化することを目標の一つとしたものである。本センターの現時点での研究において明らかとなった、「中心と周縁」といった関係が、重層性をもったものであり、しかもその関係が可変するもので、相対的であること、さらにその関係がそれぞれ主体性をもって存在していたこと、という三つの視点を共通認識として公表することとした。そしてその具体化として、中国の北魏王朝期における中心と周縁の関係を「質」という語から探った川本芳昭報告、日本列島における南北地域の関係を追究した田中史生報告をもった。二報告と上述した三つの視点の提言を含めて、このシンポジウムでの課題について認識を深めることができたと考えている。

東ユーラシアという地域概念を導入しての歴史叙述という本プロジェクトの研究は緒についたばかりである。忌憚のないご批判、ご意見をお寄せいただきたい。